宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第 19 号（2008）147–156 頁

国語科教育におけるメディア教材の意義(1)
－ニュース教材を利用した言語能力の育成－

宮田好恵[1)]・早野慎吾[2)]

The Meaning of the Media Materials in Japanese Language Education
— Development of the Language Ability by using the News Materials —

Yoshie MIYATA・Shingo HAYANO

1．はじめに

現在、情報化社会が急速に進行している。1990 年代に入りインターネットが急速に普及し、情報メディア全体が大きく変化しつつある。それまでは、情報メディアといえばテレビやラジオ、また新聞であった。テレビやラジオ、新聞などでは、一般の人は情報を受けるだけで発信することはほとんどない。しかし、インターネットではネットニュース (net news) やチャット (chat) のように一般の人が情報を発信することができる。インターネットでは匿名性が通用するために、倫理を逸脱したり著作権を侵害している内容のものも多い。情報メディアとの関わり方も大きく変化している。そのような状況において情報メディアとどのように接するか、情報メディアから何を学ぶか、また情報メディアを利用してどのような能力を育成するかは学校教育において重要な課題となっている。

近年、メディア・リテラシー教育の必要性が強調されるようになった。メディアとの関わり方が大きく変化してきている今日、メディア・リテラシーは国語科教育で扱うべき大きな課題のひとつであり、メディア教材の果たす役割は重要度を増している。ただし、メディア教材はメディア・リテラシーの育成だけでなく、さまざまな言語能力育成に活用することが可能である。たとえば、ニュース番組に関する教材では、題材を見つけテーマを設定する能力、データや資料を収集したりそれらを活用する能力、データや資料を用いて文章をまとめる能力、全体の構成を考えて効果的に言語表現する能力、また聞き手にわかりやすく伝えるスピーチテクニックなどの育成に利用することができる。本稿では、国語科教育におけるメディア教材の意義について考察する。

メディア教材にもさまざまな種類があるが、ここでは教科書教材で扱われることの多いニュース (新聞を含む) 教材を対象として、ニュース教材がどのような言語能力の育成に活用できるかを分析する。また、「テーマを見つける」「調べる」「まとめる」「表現する」「受け取る」などの学習活動の観点から、各教科書教材の特質を分析する。

---

1) 宮崎県小林市立三松小学校　2) 宮崎大学教育文化学部

2．ニュース番組の構成

児童向けにニュース番組の構成を解説している志村 (2006：p.6-7) では、ニュース番組の構成を「番組構成・取材」→「編集・美術」→「放送」に大きく３分類して解説している。マスメディアの仕組みを簡単に解説した PHP 研究所編 (1990:p14-15) では、「取材」→「制作」→「原稿作成」→「VTR 編集」→「Ｑシート作成」→「最終打合せ」→「オンエアー」のような制作プロセスを解説している。専門的な流れでは更に細分化されるが、言語教育を目的とする国語科教育では、図１のような流れで解説すると国語科としての学習活動や具体的な実践内容が理解しやすくなる。本稿においては、図１を基に分析していくことにする。

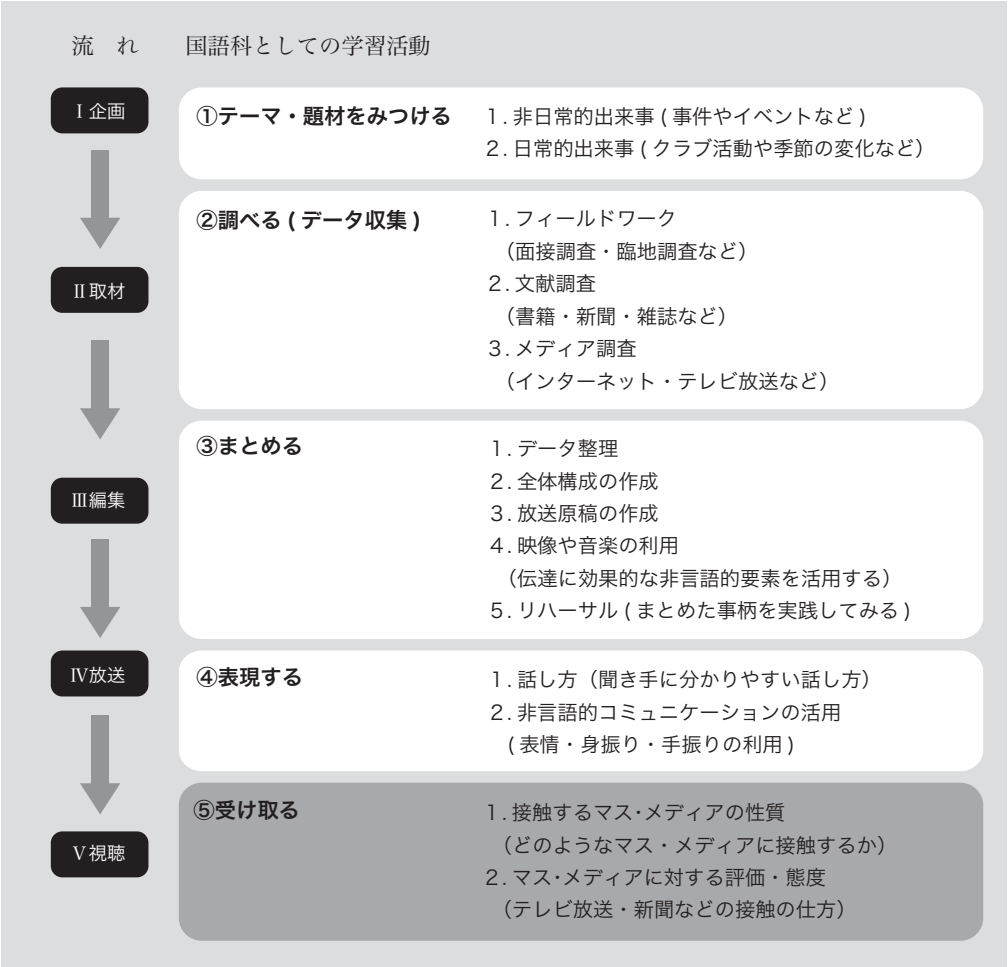

図１　ニュース番組の構成と言語能力育成の関係図

2.1. 企画とは

新聞やニュース番組では、事件や事故、政治、経済、スポーツなどに関するさまざまな情報が取り上げられている。ニュースの程度を決定する要因として井上泰浩 (2004:p.142) では、「顕

著さ・重要性」、「関心ごと（人間ドラマ）」、「対立・抗争」、「異常性」、「タイムリー」、「地理的近さ」の５つを提示している。ニュースの偏りについて井上泰浩 (2004:p.143) は「日常的なことに関心をもつ人などほとんどいないし、事件では異常性が高ければ高いほど人々の関心も高くなることは経験則からだれでも知っている。社会的に問題を提起し伝えることが報道機関の役割であり、そして、読者視聴者の関心のあることを提供し、購読し続けてもらい、チャンネルを変えずに見てもらわなければならないため、悪いニュースが多くなる」と説明している。

ニュース番組は、このように社会の現実を対象としているため、事後性が生じる。この事後性について井上宏 (2004:p.58) は、「事後性というのは、事件なり事実が起こったその結果を伝達することをいう。活字メディアはすべて事後性にならざるをえないし、フィルム・メディアも同様である。活字に表現するということで、フィルムを現像しなければならないということで、事後性はどこまでもつきまとう。しかし、電波を用いるテレビやラジオは、事後の進行と同時に伝達することができる。すなわち、生放送ができるということである」と記述している。このような特徴があるため、ニュース番組では、「企画」というものは重視されていない。

山登 (2000:p.14) では、ドキュメンタリーなどのテレビ番組制作の流れを「企画」→「取材」→「編集」→「仕上げ」と分類している。そこでは番組の生みの親は企画であるとして、テレビ番組を制作する際の企画の重要性を伝えている。その重要なはずの企画が設定されにくいところにニュース番組の特徴がある。NHK 名古屋放送ホームページでは、児童向けのニュース番組制作解説として「ニュース情報番組ができるまで」というものを作成している。ここでも企画は設定されておらず、事件発生からニュース番組作成の流れが始まる。同様に、福島中央テレビのホームページでは「ニュースができるまで」において、放送までの流れを「情報収集」→「編集会議」→「取材」→「原稿作成・編集」→「放送」という分類で紹介しており、やはり企画を設定していない。これは事後性によるものである。

2.2. 取材とは

「取材」というと記者、キャスター、カメラマンなどが現場に出かけ、インタビューや撮影をするイメージがある。しかし、実際には直接出かけていって取材を行わない場合も多い。井上泰浩 (2004:p.93) では、「大事件でないかぎり記者が現場に行って取材することはあまりない。(中略) ほとんどの事件事故の記事は、簡単な記者発表資料と電話による補足取材でできあがる」とある。ニュースの種類や内容によって、取材の仕方にも違いがある。

警察、官公庁、政党、財界などニュース価値の高い機関には、「記者クラブ」というものが存在している。この「記者クラブ」は正式な機関ではないが、記者の取材拠点となっており、事件や事故などが起きると記者クラブを通して情報が提供される。そこでの情報だけでは詳細についてわからないため、詳細な内容を取材する「番記者」や「事件記者」と呼ばれる存在がある。小室（2007:p.135) では、取材について「同じテーマをとりあげるにしても、どこで何をどのように取材するかによって内容が異なってくる。どのように撮影するか、どのようにインタビューをするかによっても、得られる事実は異なってくる」とある。取材にも、取材者の意図が反映している。

取材対象は事件や事故などのスクープ性の強いものだけとは限らず、四季の変化や地域の話題なども対象になる。後ほど述べるが、この点は国語科の授業で扱う場合に大切な事となる。

情報を収集する方法としては、直接インタビューや映像撮影を行う「フィールドワーク」や、過去の事件や、歴史などの情報を書籍や新聞、雑誌などから得る「文献調査」がある。また最近は、手軽に情報を検索閲覧できるインターネットやテレビ、また DVD などから情報を得る「メディア調査」も取り入れられている。伝える内容に応じて、情報収集の仕方も異なっている。

2.3. 編集とは

PHP 研究所編 (1990:p.14-15) におけるニュース番組の制作プロセスでは、「編集」という用語は、「VTR 編集」しかなく、「制作」→「原稿作成」→「VTR 編集」の流れとなっている。福島中央テレビのホームページでは、「原稿作成・編集」を一つに分類しているが、NHK 名古屋放送のホームページでは「ニュース台本作成」と「編集」を分けている。井上鎮雄 (1988:p.838) は「放送のニュースを編集・整理する仕事は、刻々入ってくるニュース素材を、定時ニュースの時間枠に過不足なく納める秒刻みの作業である」と説明している。原稿や台本は、内容や時間などの厳しい制限を受けて作成されている。時間や技術などの制約について井上泰浩 (2004:p.147-148) は「取材する記者、撮影するカメラマン、伝送する技術者、テープをつなぎ合わせ効果音や画像を組み込む編集、時間ぴったりに流れるよう調整をする技術者などさまざまな専門家がルールに従いフォーマットにあわせてテレビ・ニュースは制作されている。秒単位で決められた番組構成のため、ニュースは企画化された商品である必要がある」と説明している。

さらに井上泰浩 (2004:p.148) は「テレビ・ニュースの時間の制約は活字メディアとは比べものにならない。時間的にわかりやすくするためには、話を単純化しなければならず、「A のせいで B が起きた」と結論づけられる偏向となって現れる。視聴者側とすればテレビのニュースは短くて単純な構造なので簡単に理解できるが、物事の実像を正確に理解できないばかりか、誤解をしてしまうこともあるだろう」とニュース番組の危険性について記述している。事件や事故、政治社会問題は、単純な原因と結果で伝えられるものではなく、さまざまな要因が複雑に絡み合っている場合が多い。また櫻井 (2005:p.166) では「伝えられているニュースの陰に意図的に伝えられなかったニュースがあり、どの情報を伝えないかということもまた常に選択されており、私たちが目にする各ニュースは、送り手側によって選択され、再構成された情報、切り取られた情報（映像）である」と説明している。小室 (2007:p.135) は「編集の仕方いかんにより、事実とはかけ離れた映像が作られる。さらに字幕の制作、音楽、音響効果の挿入などにより、特定のメッセージの強調をはじめ、さまざまな脚色が可能である」と記述している。この編集という過程において、制作者の意図が大きく入り込むことを理解しておく必要がある。

2.4. 放送とは

テレビニュースは、事件や事故などの映像とともに、アナウンサーやキャスターが音声によって情報を伝えている。渡辺 (2007:p.299) はニュース原稿を読み伝える一般的な形式の「ストレートニュース」、ニュースを単に読むだけでなくわかりやすく解説したり語りかける形式の「キャスターニュース」とに分類している。ストレートニュースもキャスターニュースも、冷静で客観的な語り口調で表現するのがニュースの特徴である。アナウンサーが通常ニュース原稿を読む早さは毎分 350 字程度である (山田 2007:p.103)。これは毎秒 6 字。拍にして 10 拍 / 秒ほどの速さであり、ほぼ一定のペースで発音していることになる。

キャスターの存在について、井上宏 (2004:p.64-65) では「大きな事件が起きたとする。そのとき、その事件の内容を知りたいという強い興味も働く。それと同時にどういう反応をすべきか、考え方をすべきかという関心も働く。あのキャスターならどういう反応を示すであろうか、とその人間に興味をもつ、そういう興味を持たれないキャスターは魅力がないというべきである」とある。ただ原稿を読むだけではなく、コメントを述べるのがキャスターということになる。それだけにニュースキャスターの発言の危険性を指摘する意見もある。前田 (1993: p.111) は「どこからどこまでがニュースで、どの部分が彼の意見かがごっちゃになるのではないか。判断力の乏しい若い人の場合、ニュースを客観的にとらえ、自分なりの判断と意見を持つくせがつかないまま、他人の解釈に全面的に同調するおそれがある」と述べている。ニュースを読むことが中心のアナウンサーに対して、キャスターはニュースとコメントの両方が求められており、そのためには両者の区別が必要となる。

アナウンサーやキャスターの役割として「カメラからカメラ、遠景からクローズアップへの切り替えをつなぐために必要である」(井上宏 2004:p.101) という意見もある。アナウンサーやキャスターは、ニュースの内容伝達や解説だけでなく、ニュース番組全体の流れや構成にも深くかかわっている。ただし、放送時においてはアナウンサーやキャスターだけが活動しているわけでなく、スタジオの内外で、多くのスタッフが活動している。ビデオを再生したり中継現場とつないだりする副調整室スタッフや番組の進行役のディレクターなど、多くのスタッフが番組を支えながら放送が行われている。

2.5. 視聴とは

視聴者は新聞や雑誌のように、ニュース番組ニュース番組から自分に必要な情報を自ら選択して情報を得ている場合もある。しかしテレビニュースでは放送局が流す情報を一方的に受け取っている場合も多く、映像などの影響もあってさらに伝えられる情報を正しいと感じる傾向にある。井上宏 (2004:p.111) は次のように説明している。

> テレビ映像はきわめて秀れた現実再現性をもっており、また同時性のメディアであることからも、現実をそのまま映し出すという見方が強い。映像は活字に比すれば、比較にならない現実再現能力をもっており、映像の「客観性」からテレビはいつわらないという信仰が生まれるのも無理はない。テレビ映像そのものは、カメラがもつ技術的歪曲を別としても、現実を反映していることに間違いはない。しかし、テレビカメラは、しょせん現実を切りとり、断片化し、現実の全体像はそれらの積み重ねによって生み出されざるを得ないのである。虚偽の現実を映し出すわけではないが、全体像の構成の中には、送り手の操作性が入るのである。

また井上宏（2004:p.138）では次のように虚偽の報道のあることを指摘している。

> テレビ映像は、それがいくら生中継であっても、作り手の人間と組織を経由して作り出されたものなのであるということを忘れるわけにはいかないのである。ほんとうの出来事かと思っていたら、作り手たちがでっちあげた事件であったということもあるのである。

大石 (2004:p.246-247) は虚偽報道の要因について次のように説明している。

> 報道という営みが、本質的にはその主体であるジャーナリストの問題意識や感性に立脚するものであり、かつ、それが常により多数の読者・視聴者の獲得を目指して行われるものである以上、そこにある程度の“演出”が伴うことは必然であり、また必要なことであるでしょう。問題は、報道される事実に対してある程度を超えた演出が施され、それが読者・視聴者ひいては社会全体に何らかの不利益をもたらす場合であり、その場合にこの「虚報・やらせ」問題が発生することになるわけです。

メディアによって伝えられる情報は、何らかの意図が組み込まれていることを十分意識する必要がある。

テレビの影響は、児童の実体験にも影響を与えている。映像の影響は現実感を伴いやすいため、実際の体験や経験、努力をしなくてもまるで自分ができるかのように感じてしまうことがある。情報化社会の発達した今日、ただ送られたものを無自覚に視聴するだけでなく、この送り手の意図が汲み込まれた情報を処理する能力、つまりメディア・リテラシーが強く求められている。

3．ニュース教材を利用した言語能力の育成

ニュース教材を利用した場合、図１に示したＩ企画からＶ視聴までの流れを扱っても、また一部を強調しても言語能力の育成には有効であると考えられる。ただし、育成できる言語能力は強調する部分によって異なる。

3.1. 企画：テーマ・題材をみつける

企画過程では、テーマや題材を見いだす訓練ができる。ニュース番組の場合、他の番組よりも企画の占める比重は少ない。それは、前述のとおり事件や災害、政治・経済の動向などの情報を伝達するという事後性による。「ニュース番組作りの現場から」(『国語　五下　大地』光村図書 2005:p.31) では、東京のテレビ局のデスクのもとに、山梨県支局から「富士山の噴火に備えた初めてのひなん訓練を十一日後に行う」という連絡が入ったという内容ではじまる。自らがテーマを見いだすと言うよりも、偶発的な要素が強い。そのため PHP 研究所編 (1990) のように企画を設定していない文献もある。しかし、教科書教材にはニュース番組を疑似的に作成してみるという内容のものもあり、その場合、自らがテーマ・題材を見いだす「企画」を設定する必要がある。そして、ニュース番組で扱われる事件や事故ではなく、身近なところからでも題材を見いだせるということを解説する必要がある。児童が偶発的な要素を題材に求めると、題材を見いだすことは困難になる。「ニュース番組作りの現場から」に続く「工夫して発信しよう」というニュース番組を疑似的に作成する単元では学校行事の「球根植え」が題材として扱われている。運動会や修学旅行のような非日常的なイベントはもちろんのこと、日常の学校生活でも題材は見いだせることを理解させることが大切である。

3.2. 取材：調べる (データ収集)

テーマが決定したら、データ収集 (材料を集める) が必要である。文章にはデータが必要でないものもあるが、データを扱うことで客観性が高くなり、説得力も増す。ニュースは、事実を報道するという性質上、データや情報が必ず必要となる。ニュース番組を教材として使用することで、データ収集や調べることの重要性を学習させることができる。使用するデータは、論をまとめるときの根拠となる。そのため、データを使用することで、意見における根拠の重要性を学習させることができる。

データ収集の方法には、フィールドワーク、文献調査、メディア調査などがある。また、それぞれの調査方法はさらに細分化できる。たとえばフィールドワークにも人間を対象とする調査 (社会調査など) や人間外を対象とする調査 (環境調査など) がある。社会調査にも個別面接調査、配票調査、集合調査、郵送調査などがあり、さらに細分化できる (安田他 1960)。ただし、国語科教育においては、そのような調査方法の詳しい知識まで解説する必要はないであろうから、図 1 に示したように人に聞く (フィールドワーク)、書かれているものを調べる (文献調査)、インターネットや DVD などのメディアから調べる (メディア調査) などのように大まかな分類で解説する方がよかろう。その際、ひとりの人に聞くよりも複数の人に聞く方が信頼性が高いこと、文献には信頼性の高い文献と低い文献があること、またインターネットにも信頼性の高いものと低いものがあり、一般に文献よりもインターネットは信頼性が低いことを解説する必要がある。「工夫して発信しよう」(『国語　五下　大地』光村図書 2005:p.40) では「取材をする。このときは、複数の人にたずねるなどして、情報を確かめる」という記述があり、その点を指摘している。このようなデータの性質を理解できるようになることは、データに対する評価や態度を学習させることにもなる。

3.3. 編集：まとめる

この編集過程においては、収集したデータを整理することや、その整理したデータを使用して論をまとめることなどを学習することができる。論をまとめるためには、全体の構成や分量、またバランスなどを考慮して文章化する必要があるため、単なる文章作成術ではなく、全体の構成を考えてまとめる文章構成力を育成できる。「放送原稿を書こう」(『小学国語　5 下　ひろがる言葉』教育出版 2006）などは、文章構成力の養成を主眼とした教材といえる。

新聞や雑誌などでは、文字を中心に伝達するが、ニュース番組では映像や音楽 (非言語的要素) の補助を受けながら音声言語により伝達する。放送原稿には文字言語が使用されるが、それは音声として発音されることを前提とした文字言語である。そのため、音声言語と文字言語の違いを意識させるのに利用することもできる。文字言語として表記したものを読み上げても聞き手は理解することが難しい。放送原稿は音声として聞いて理解できる表現でなくてはならない。そして、その表現は音声言語ではあるが、ふだん自分たちが使用している音声言語とは違うことば (共通語) である。テロップなどの効果を分析することによって、文字言語の視覚的効果について学習させることもできる。

リハーサルを行うことで、作成した原稿の問題点 (たとえば同音異義語を含んでいて誤解が生じたり、構成に問題があって理解しにくいなど) に気づくことができる。これは実際に発音することで自分自身でも問題点に気づきやすくなり、さらに他者からの意見を聞くことで、自分の気づかなかった問題点に気づくことができるためである。

3.4. 放送：表現する

放送過程では、アナウンサーやキャスターの話し方を分析することにより、理性的に聞こえる発話を学習することができる。同じ放送原稿であっても、発話の仕方によって、聞き手の理解度が大きく異なっているという調査報告がある (秋山 1993)。上手な発音といっても、噺家とアナウンサーでは大きく異なる。アナウンサーの発話は、スピード、ポーズのとり方などが一定であり、自然なイントネーションで淡々と発話されるのに対して、噺家は話の内容によって発話スピードやポーズを自在に操り、落ち着いた感じや緊迫感などを演出している。杉藤 (1989:p.357) は宇野重吉の語り聞かせ「オオカミの大しくじり」について「文字どおり「起承転結」の表現と言うことができる」と表現している。ニュース番組を扱った教材では、理性的との印象を与えるアナウンサーの発話法を学習させるには都合がよい。「ニュース番組を作ろう」(『新編　新しい国語　六上』東京書籍 2006）などは、この放送過程に重点をおいた教材といえる。しかし、「司会者、レポーター、アナウンサー、キャスター、それぞれの役割に応じた話し方のくふうをする」(p.87) とあるだけで、具体的な話し方の解説はない。アナウンサーの話し方は訓練された特殊技能であり、具体的に解説しないと理解することは困難である。「くふうする」という表現で解決できるものではない。音声学的な基礎知識を教員が持っていないと対応できる内容ではない。

この放送過程で学習すべき点は話し方だけではない。ニュース放送の映像をみて表情や身振りなどの非言語的 (ノンバーバル) コミュニケーションを学習させるにも都合がよい。アナウンサーは常に目線や口元などに気を使い、表情を演出している。そのような表情にどのような効果があるかを解説して、非言語的 (ノンバーバル) コミュニケーションの重要性を理解させることも必要である。

3.5. 視聴：受け取る

企画から放送までは、情報を発信する側のことであるが、この視聴に関しては受信する側のことであり、主体が逆転する。近年、メディア・リテラシーが教育の課題として取り扱われている (由井 2002)。このメディア・リテラシーはどのようにメディアと接し、どのようにメディアを判断するかという受け手の態度に関することであり、国語科として扱う重要課題のひとつである。特に緊急を要するのがインターネット (特にネットニュースやチャット) の扱いであるが、この問題はニュース番組の教材ではなく、インターネットそのものを扱う単元が必要である。

ニュースでは事実性と客観性が重視されているが、前述のとおり何をどの程度扱うかは、番組制作者の意図が大きく反映している。露木 (2004) では、同じ事件について、各放送局がどのように報道したかを分析している。「ニュースを読み解こう」(『小学校　国語　六年下　みんなと学ぶ』学校図書 2006）や「新聞の研究 (調査・報告)」(『小学国語 6 上』大阪書籍 2006) などは、メディア・リテラシーを重要視した教材といえる。

4．各教科書の特徴

「ニュース番組作りの現場から」(『国語 五下 大地』光村図書 2005 p.30-38) では、テレビニュースがどのように制作されているかを具体例を用いて解説しており、図 1 に示した企画から放送までの流れをすべて扱っている。放送された映像や放送原稿なども掲載されており、具

体的でわかりやすくまとめられている。

次に**「工夫して発信しよう」**(p.39-44) がきて、「ニュース番組作りの現場から」で学習した内容を利用して、疑似的にニュースを作成してみるという内容になっている。この教材では、特に編集の過程や、情報を発信する側の意図について解説が行われている。事実に基づく情報発信の流れがわかりやすく解説されており、全体の流れを理解させるのに重点を置いている。図１の①から④までの学習内容を万遍なく学習できる構成となっており、広く浅く学習させることのできる教材といえる。放送過程に関する話し方についてはほとんど解説されていないが、それはニュース教材の前にある「方言と共通語」の単元で解説されている。メディア・リテラシーに関しては最後に少し触れられているだけである。

「ニュースを伝え合おう」(『新編　新しい国語　五上』東京書籍 2006 p.72-79) では、「ニュースについて調べよう」「ニュースを伝える練習をしよう」「ニュースを伝えよう」などの小見出しを設けてニュースの流れについて簡単に解説している。この『新編　新しい国語』では６年生でもニュース教材を扱っており、本教材は、その導入の役割を果たしている。

「ニュース番組を作ろう」(『新編　新しい国語　六上』東京書籍 2006 p.82-90) では、５年生の内容をふまえての単元として構成されており、「ニュースについて調べよう」「自分たちのニュース番組を作り、発表の練習をしよう」「ニュース番組発表会を開こう」という５年生の教材とほぼ同じ小見出しを設けている。ニュース番組の構成やキャスティングを中心に解説している。図１における③の２・３・４・５、④の１に重点を置いた解説をしている。ただし、話し方については既に述べたとおり「それぞれの役割に応じた話し方のくふうをする」(p.87) とあるだけで、具体的な解説はない。また、役割分担や番組構成を理解させるには有効な教材であると思われるが、そのことが各自の言語能力育成に有効であるかは疑問である。

「放送原こうを書こう」(『小学国語　５下　ひろがる言葉』教育出版 2006 p.18-21) では、タイトル通り放送原稿の書き方について取り扱っている。本教材の前に「森を育てる炭作り」で文章構成を学習させ、その流れで放送原稿のまとめ方を解説している。図１における③の３に絞った解説をしている。音声を基にした表現であることを解説しているなど、その箇所に関しては詳しい解説をしているが、原稿作成に到達するまでの流れがほとんど解説されていない。ある項目に焦点を当てると、その項目は理解が深くなるが、全体の流れと他の項目の理解が浅くなる。

「ニュースを読み解こう」(『小学校　国語　六年下　みんなと学ぶ』学校図書 2006 p.48-53) ではメディアの性質を解説し、情報の受取り方に重点をおいている。メディア・リテラシーを重点的に扱った内容で、受け手がどのような影響を受けているかを考えさせている。図１における③の２・４、④の１も解説しているが、⑤の受け手に関する項目を重点的に扱っていることが本教材の特徴である。報道の垂れ流し状態が指摘されている今日、メディアから情報を得ることも重要だが、報道に惑わされない判断力が重要である。日常生活の中でどのように情報を受け取るかという現代社会に必要不可欠な能力育成に有効な教材である。

「新聞の研究 (調査・報告)」(『小学国語　6 上』大阪書籍 2006 p.44-51）はニュース番組ではなくニューズペーパー (新聞) を対象にメディア・リテラシーについて深く入り込んでいる。この教材は「調査・報告」という副題が付いているとおり、単にメディアの性質を解説した内容ではなく、表面的には見えない報道部分を調査によって明らかにしようというものである。図 1 に示した流れとは異なり、「視聴 (受け取る)」を題材として「調べる」→「まとめる」→「表現する」という流れになっており、①から⑤までの国語科教育の目標をすべて扱える。具体的なデータや報告書も掲載されており、高度な分析能力と表現能力を養成できる構成になっている。小学 6 年生の教材としては、少々高度過ぎる感があることと、新聞を題材にしたことで、関心が低くなることが考えられる。しかし、児童の関心に適合させることも大切であるが、社会人として必要な能力を育成することはそれ以上に大切な事である。年少者の活字離れが指摘されている今日、評価すべき教科書教材と言える。

5．おわりに

ニュース教材を用いてどのような言語能力を育成できるかについて分析してみた。本稿では「テーマをみつける」「調べる」「まとめる」「表現する」「受け取る」という学習活動の観点から分析したが、さまざまな言語能力育成が可能であった。今回は育成できる言語能力についてまとめたが、児童の関心を考慮してどのように教育すべきかという観点からの分析も必要である。次回は、児童の関心を考慮した指導方法について分析する。

【参考文献】

秋山和平（1993)「放送音声の教育」『国際化する日本語　話し言葉の科学と音声教育』クバプロ
井上鎮雄 (1988)『日本語百科大事典』大修館書店
井上宏 (2004)『情報メディアと現代社会－「現実世界」と「メディア世界」－』関西大学出版部
井上泰浩 (2004)『メディア・リテラシー－媒体と情報の構造学－』日本評論社
大石泰彦 (2004)『メディアの法と倫理』嵯峨野書院
角野栄子他編 (2005)『新編　新しい国語　五上』東京書籍
角野栄子他編 (2005)『新編　新しい国語　六上』東京書籍
木下順二他編 (2006)『ひろがる言葉　小学国語　5 下』教育出版
小室広左子 (2007)『日本のマスメディア』財団法人放送大学教育振興会
櫻井美幸 (2005)『送り手のメディアリテラシー－地域からみた放送の現在－』世界思想社
志村隆 (2006)『くわしい！　わかる！　図解日本の産業 8 マスコミ・ＩＴ』学習研究社
杉藤美代子 (1989)「談話におけるポーズとイントネーション」『講座　日本語と日本語教育』２明治書院
露木茂 (2004)「マスコミニュケーション論」『マスコミニュケーション論』学文社
中野収・早川善治郎編 (1981)『マスコミが事件をつくる－情報イベントの時代－』有斐閣選書
浜本純逸他編 (2006)『みんなと学ぶ　小学校　国語　六年下』学校図書
前田利郎 (1993)『マスメディアへの視点－考えるヒントとして－』地人書館
前田富祺他編 (2006)『小学国語　6 上』大阪書籍
宮地裕他編 (2005)『国語　五下　大地』光村図書
安田三郎・原純輔（1960)『社会調査ハンドブック』有斐閣双書
山田敏弘 (2007)『国語教師が知っておきたい日本語音声・音声言語』くろしお出版
山登義明 (2000)『テレビ制作入門－企画・取材・編集－』平凡社新書
由井はるみ編著 (2002)『国語科でできるメディアリテラシー学習』明治図書
渡辺武達 (2007)『メディア学の現在（新訂)』世界思想社
PHP 研究所編 (1990)『図解 世の中こうなっている－ PART' マスメディアのしくみ－』PHP 研究所
NHK 名古屋放送局 (http://www.nhk.or.jp/kodomo-land/index.html)
福島中央テレビ (http://www.fct.co.jp/zoomfct/)